

東春秋に、なれなかった男

女王の橋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

凡才が天才を追う。

その果てに待っているものとは

時間軸は基本的に修が入隊する前の話です。

いずれ原作に沿っての話も展開します。

チート設定は基本ありませんが、一部トリガーの独自設計や未登場キャラの独自解釈もあります。

目次

第一章	再起	005	横山一馬③	19
第一章	再起	004	東春秋①	15
第一章	再起	003	沢村響子①	11
第一章	再起	002	横山一馬②	8
第一章	再起	001	横山一馬①	4
000	プロローグ			1

000 プロローグ

東春秋。

ボーダー最初のスナイパーにして、かつてA級1位部隊を率いた男。

「この物語は彼が主役ではない。」

「東春秋」という天才に憧れた凡人がみつともなく足掻く、シンデレラストーリーとはかけ離れた泥臭い物語。

—————

ボーダー専用の地下道路をアメリカンバイクが走る。

シャドウの400cc。

チョップパーハンドルと黒のボディが印象的だ。

彼はボーダーへの通勤は必ずバイクと決めている。

基地まで数kmはあるが、この何もない一本道が好きなのだ。

思えば数少ない没頭できる時間の一つかもしれない。

メットはブラックのジェット型、グローブは茶色のレザーと決めている。

ふとサイドミラーを見ると、後方に見覚えのある車が現れた。

営業部長を務める、食えない元上司のものだ。

付かず離れずの距離を保っていることに対し、彼はため息をつきながらバイクを走らせた。

「戦闘員復帰、おめでどう。心境はどうかかな？」

「至って普通の気分です。唐沢さんこそ…：ぴったりケツに張り付いてなに考えてるんすか？」

「いや相変わらず綺麗な車体だと思ってね。惚れ惚れするよ」

バイクを所定の位置に駐車すると、待ち構えていたように唐沢が現れた。

彼は元々唐沢の部署にボーダーの営業職員として所属しているのだ。

上司と部下の関係は終わったとはいえ、軽口を叩き合えるのは彼がボーダー古参の人間だからだろう。

「ちよつとした復帰祝いに。気に入らなかつたら破棄して貰って構わない」

「頂きます。：唐沢部長、今までお世話になりました！」

礼に対してはわずかに口角を上げ、USBを手渡した後唐沢は足早にエレベーターに向かった。

—————

横山一馬。年は25歳。

東春秋と同期入隊であり、現在はB級フリーの隊員である。

まず一言で彼を表すのであれば「厳つい」

控えめに言つて「ワイルド」である。

サイドをツープロックに刈り上げ、左側に流した前髪

身につけているJORDANのシューズや、パイソン柄のジャツケットから見える彼の印象はとてもではないが近寄りがたいオーラがある。

諏訪や弓場と3人揃えば本職も道をあけるであろう厳つきである。

「あ、一馬さん？」

「米屋か。久しぶりじゃねえか」

自販機コーナーで休憩をしていた米屋に出会した。

「今日、なんだかイカツイっすね。いつもスーツだから一瞬わかんなかったっす」

「そこはワイルドと言えよ」

「今暇っすか？良かったら模擬戦でもどうっすか？」

本部に来た目的としてはフリー隊員の本登録のためだ。

内勤から戦闘員への移行のため、面倒な事務手続きは免れない。

「悪いいな。用事があんだわ」

「えくいいじゃないっすか。ね、5本だけ！」

「しつげえぞ、A級様」

一馬としては軽くあしらったつもりだが、あくまで米屋は引き下がない。

「もしかしてヒョってるんすか？そりゃあ、しばらくリーマンやって

た人には荷が重いかな？」

「…あ？」

「恥かくなら早い方が良いと思つて。今の一馬さんじゃカゲさんやイコさんには敵わないっしょ？」

明らかに挑発である。

いくら米屋が軽いとはいえ、無礼ではない。

だが目の前の男を激昂させるには十分であった。

「ブースに入れ。後悔させてやんよ」

その言葉にA級アタッカーは静かに笑つた。

第一章 再起 001 横山一馬①

横山一馬とはどう言った人物か。

前線で活躍している隊員に問うと、意外にも様々な反応が返ってくる。

「フリがうまいんだよな、あの人は」

「感情の上から感情を刺してきやがる」

「容赦がない、手段を選ばない。そんな所かしら」

「1か10しかない感じ。うっぎ」

「ボロボロの姿が一番似合うな!」

「コミュ症。それ以上聞くな」

「どうして俺に聞くんだ?同期だから?なるほどな」

「叶えられもしない目標にみつともなく縋りつく奴だ。重度のロマン

チストってところかな」

「ただそのひたむきな姿が尊敬を勝ち取っている。誰もが呆れるが同時に褒め称える」

「横山一馬という男は、そういう人間だ」

—————

三輪秀次はキレていた。

ミーティングがあるとあれほど事前に伝えていたのに、自隊のアタッカーは一向に姿を現さない。

尤も、行きそうな場所は見当がついている。

(やけにザワついているな…)

一番可能性が高い個人戦ブースに顔を出すと

大きな人ばかりができていた。

「おい、米屋先輩相手に互角だぞ。何者だあの顔が怖い人」

「てゆうか、いつまで続けるんだ?もう30戦目だぜ…」

モニターには至近距離で斬り合う2人が。

最早見慣れた相方と、かつての弟子の姿。

「腕が落ちてないようで安心しましたよ!ただ本気でこないのはまだ

まだ舐められてるって事っすかね?!

幻踊弧月のコンビネーションをなんとか凌ぎ切る。

均衡してるように見えるが、内情は一馬の圧倒的不利だった。

「仕合ってる最中にお喋りとはお前こそ余裕じゃねえか」

一馬のスタイルは自分の距離・ペースで本領を発揮するため、槍相手では懐に入りにくい。

何より旋空と幻踊を使い分ける米屋はまさに天敵である。

「アレ、使って下さいよ。このままじゃジリ貧でしょ?」

「黙れ」

なんとしても奥の手を引き出して見せる。

米屋からは並々ならぬ執念を感じ取れた。

「もったいねーけど秀次にドヤされるんで、そろそろ終わりにしましょうや。」

「らあっ!!」

激しい突きの乱舞になんとかいなすことでしか対応できない。

「ぐっ…」

体勢が右に崩れたのをマスタークラスが見逃すわけがない。

「左腕、もーらいー」

ザンツ

「…はあ?」

槍が上腕二頭筋から下を切り落とした。

が、それとほぼ同じく一馬が深く一步を踏み込んだ。

左腕を犠牲にして一瞬の隙に距離を詰めた。

そしてガラ空きの腹部に横薙ぎを叩き込む。

「あつぶね!!」

「終わりじゃねえぞ…」

渾身の一撃はシールドで防がれたが

縦薙ぎ横薙ぎと連撃の手は緩めない。

こうなってしまうえば一馬のペースだ。

米屋は徐々に後退していく。

(おいおい。片腕もげて全身からトリオン漏れれて…なんで笑顔でい

れるんだよ。相変わらずこえー!!)

一馬は笑っていた。

側から見れば狂気のお笑いでも言うべきだろうから。

顔にも米屋によって負わされた傷が多数あり、それが狂気を助長している。

「うおおお…!!」

猛ラツシュを何とか受け止め、鏢迫り合いの形になる。

その膠着の隙を一馬は見逃さなかった。

ドガツ!!

「ぐっ?!」

なんと膝蹴りを腹部に叩き込んでみせたのだ。

予想外の攻撃に本来のダメージ以上の衝撃が走る。

(いける!!)

米屋の体が前傾になった瞬間に身を引き刀を左斜め下に下ろす。

ちようど一馬の弧月が米屋を槍を抑えこんでいる形だ。

ダンツ!!

そこからの動作はある意味目を見張るものであった。

押さえ込んだ槍を足蹴に飛び上がると、米屋の首元を目掛けて弧月を振るった。

だがその斬撃は致命傷を与えてはいたが、緊急脱出させるには至らず。

(ちげーだろ。そうじゃねーだろうがよー)

米屋はますます不機嫌な表情だが、構えを変えた一馬の姿を見て口角を上げた。

「それだそれ!それを待ってたんすよ!!」

八相の方から右腕を引き、鋒を相手に向けた独特の構えは最早狂気。

攻撃全振りのお構いなし特攻スタイルだ。

2人が踏み出した刹那、剣戟は

散らなかった。

「んあ!？」

「ぐおっ!!」

鉛弾を複数受けた2人は、無様に地面に転がった。

なんとか弾丸の来た方向に目を向けると…般若、否、三輪秀次の姿があつた。

「熱くなりすぎだ、2人共。」

「すみません。」

第一章 再起 002 横山一馬②

「この3カ月でかなりの入隊がありました。まだ存在が知れてないあなたがあのような目立つマネをしでかしたら、場が混乱する事くらいわかりませんか？」

「さーせん。」

「お前は何度同じ事を繰り返す気だ。あと不用意に個人戦の様子をモニタリングするんじゃない。」

「さーせん。」

個人戦に割って入った三輪は2人の首根っこを掴み、休憩場のソファーに正座させていた。

「陽介、先に行っている。今回は月見さんに取り成しておくが、これっさりだと思おうように。」

米屋をすぐ連れていかない限り、彼なりの配慮だろう。

何より一馬を知る1人のボーダー隊員として、あのようなモノを見せられて全く心動かされない訳ではなかった。

「秀次は、相変わらず怖いな。」

「うっす。」

「そして蓮のやつも、怒らせたくねえな。」

「うっす。」

米屋にとつて一馬は不思議な人間だった。

眉間にシワを寄せて近寄りがたい顔をしているのはデフォルトで、基本的にユーモアのある面白い人間なのだ。それが時にセンチメタルになる時があれば、急に口数が減る時もある。

「一馬さん。」

「ん？」

「俺、やっぱり一馬さんは前線にいてナンボの人だと思います。正隊員になるためのノルマはとっくにこなしたのに、また唐沢さんのところに戻っていくの、正直気に食わなかったっす。」

「お、おう。」

「でも根本が変わってないようで安心したわ。最後のあの瞬間、ゾク

ゾクしましたもん。」

サブトリガーを一切使わず、孤月一本で挑んできた事に屈辱すら覚えた。

自分はその価値に値しないのかと。

しかし、刀を交えていくうちに思い出した。

横山一馬という人間が、必要以上に義理堅い男だという事を。

「あー、なんていうかな。俺が正隊員に戻れたのには実際には色々な人達の口添えがあっただ。それに対してしつかりと筋を通したかったんだ。」

「あとはわざわざ柄でもない挑発をしてまで個人戦に誘ってくれたお前に対して、きちんと拘った形で臨みたかった。」

「まあ…あからさまな台詞でしたからね…」

「覚えてねえか？初めてお前と個人戦した時の事。」

「おい、そのカチューシャ。暇なら一戦やらね？」

「俺は孤月しか使わん。10戦やって一回でも引き分けたら300ptやるよ」

正隊員まであと少し。その少しが遠かった。

トリオンが少なかった米屋は努力で地道に上がっていくしかなかったのだ。

それを知ってか知らずか声をかけてくれた。

煽りに煽られ、なんとか最後に引き分けた米屋はそのポイント見事にB級に昇格したのだった。

「…覚えてますよ。だから今度は俺の番だっと思ってたんですよ。」

「しかし、漫画のような煽り方だったな。」

「一馬さんよりマシですね！タ〇ついてんのか？とか、一生地面にキスしてるとか、弓場さんでもんな台詞使わねー!!」

「そうか？まあともかくありがとう。」

「次はフル装備の状態で勝ち越しますから。」

「言ってる。」

「遅れてすみませーん。」

「米屋先輩、また遅刻ですよ。何やってたんですか？」

「一馬さんとバトってよ、つい熱くなっちゃった。」

「横山さんの事ですか？」

ボーダーに入隊してまだ間もない古寺は彼の事をよく知らない。

「それで、戦績はどうだったの？」

「月見さん！お、遅くなってすみません！」

「どうだったの？」

「アツ、ハイ。30戦やって16勝1分けでした。」

「彼、どうせまた変に拘った戦い方でもしたんでしょ。」

「孤月一本。」

月見はそれを聞いて深く溜息をついた。

「噂には聞いてましたが：バトルジャンキーですね。」

「違うわね章平君。彼はただの変態よ。」

「へ、変態…」

「ちげーねー。」

一馬の事をこき下ろす様子は、どこか彼女の幼馴染みをなじる様子に似ていた。

「彼はトリガーセットに旋空を入れていない。言葉の通り孤月一本ね。」

「ちなみに、俺は旋空も幻踊も使ったぜ。」

「ええ：それ、ただ自らを不利に追い込んでますよね？」

「ドMというより、ただのムツツリなのよ。」

「陽介くん。ちなみに、仮にフル装備で戦ったとして勝算は？」

「30本やって、10本取ればマシな方すかね。」

米屋は意地の悪い笑顔でそう言い切った。

第一章 再起 003 沢村響子①

横山一馬には会いたくないボーダー関係者が2人ほどいる。尤もこれから行く先ではその1人との接触は免れないのだが。

B級隊員としての登録手続きのため、人事局で書類記入を済ませると

本部長室に向かっていた。

何やら忍田本部長直々に話があるらしい。

(忍田さんだけならまだいいんだよな。バイクといいライダーズジャケットといい、あの人とは何かと話が合う。けど…)

「何突っ立ってるの？早く入れば」

背後からの予期せぬ声に思わず背筋が伸びる。

「…出た。出たやがった」

「人を幽霊みたく言うな！」

「ああ…!!」

お決まりのローキックが脛を捉え何とも情けない声が出る。

「随分元気そうじゃない」

「そつちこそな。忍田さんに迷惑かけてないだろうな？」

皮肉に対してもう一発蹴りを入れようかという沢村を見て即座に後ずさる。

「相変わらずの減らず口ね。でも安心した。いつもの横山君だ」

「久しぶり、沢村」

数年前は嫌というほど顔を合わせていたのに、この顔が懐かしく見える日が来るとは思わなかった。

「もしかしてお前も呼ばれてんの？」

「お生憎様。私は関係ないわ。けど、後で何があつたか教えてね？」

「アレ、本気だったのか？また酔い潰れないでくれよな」

数日前、一馬の復帰を知ってか沢村から飲みの誘いが入っていた。

冗談半分に受け止めていたものの、この同期はどうやら真剣らしい。

「どうせまた残業だろ?」

「今日は事前に定時退社の申請済みです。忍田本部長にも承認済みよ」

「そいですか」

「じゃあ18時にお店でね」

「横山、了解」

「横山君」

「あ?」

「漆間君、メテオラのポイントが8500超えたわよ」

「マジか。あいつ、まだごつつあん爆撃続けてたのか…」

してやったりの顔で舌を出した沢村の顔に腹が立ち、そそくさと本部長に入室した。

漆間☒。

ボーダーのぼっちスネイクと自称する異質な隊員だ。

彼も一馬と大きく関わっている人間だが絡んでくるのはまだ先の話。

「失礼いたします」

「横山、久しぶりだな。ひとまずかけてくれ」

忍田との接点は実はあまり多くない。

とはいえ昔孤月の扱いによび悩んでいた時にとあるヒントをもらったことがある。

それで背伸びする事により、トップアタッカー達に辛うじて追いつけることができた。

「シャドウの調子はどうだい?」

「絶好調です。忍田さんは最近乗られていますか?」

「それが全くでね…このままだとバッテリーが上がってしまうかな」

忍田がこういった世間話から入る時は、何かしら重要な話題がある時だ。

「最近、迅とは会ったか?」

「いえ。数ヶ月以上久しく顔を見ていないです」

個人的な繋がりを除いて玉狛とはあまり縁がない。

迅とも在籍年数的にも古参になるという理由で、会えば世間話を交わすくらいの間柄だ。

「そうか…実はその迅から君に言伝があつてね」

「あいつから？」

「単刀直入に言う。三雲修という新人がいてね。もし見かけることがあつたら気にかけてやってほしい」

「それとこの数ヶ月で正隊員の顔ぶれも大きく変わった。出来る限り彼らとコミュニケーションを取ることに」

「最後に、迅悠一との接触は一切断つように」

「—————」

正直まだ混乱している。

なぜ迅が直接伝えてこないのか。

三雲修とは何者か。

そして、迅との接触禁止。

彼のS E的に無理矢理納得せざるを得なかったが、大して親しくない者から復帰早々謎のオーダーが下されて頭が回る訳ない。

ひとまずバイクを自宅に置くと沢村との約束のため店に向かう。

東三門付近にある老舗のバー。

実はボーダーの上層部などもお忍びで訪れている。

特に店名はないがマスターの姓から「劔持」、「劔持さん」と呼ばれていた。

実は一馬とは師弟関係にあるのだがそれはまた別の話。

「こんばんは」

「いらつしやい。今日はどうする？」

「ブラックレインを」

「一人かい？仕事帰りかい？と余計な詮索をしてこない辺り、2人の付き合いの深さが窺える。

「ブラックレインでございます」

ブラックサンブーカの淡い黒がシャンパンの泡で浮き上がる。

松田優作最後の出演作のタイトルをよく名付けたものだ。

カランカラン

入り口のベルが鳴る。

沢村が来たと思いい目を向けると、

180cmを超える長身、ロン毛。

「げっ」

「アンタ達、息合いですぎ」

会いたくないボーダー隊員その2がそこにはいた。

第一章 再起 004 東春秋①

気まずい。非常に気まずい。

空気を読んで間に座ればいいものの、東を隣の席に押し付けてくるのだから気遣いのベクトルがズレている。

「お待たせいたしました。ルビーカシスとギネスでございます。」

「ではでは！横山君の正隊員復帰を祝って…乾杯〜!!」

「乾杯…」

恐らく東も彼がいるとは知らされてなかったのだろう。

かなりバツが悪そうな顔をしている。

「2人して何しかめっ面してるの！久しぶりに顔を合わせたんだから少しは話さないよ」

勢いに任せて物事を進める沢村に若干イラつき睨みつけるも、本人はすっかりマスターと談笑しており虚しくなった。

「小荒井と奥寺は元気か？」

「あ、ああ。あの2人は元気が有り余っているよ」

「釣りに最近行ってるのか？」

「いや、スナイパーの訓練指揮が忙しくてな。時間を取れてないんだ」
「気まずい。非常に気まずい。」

何より会話が続かないし、意識しなくとも尋問のようになってしま
う。

「横山君、こういう時くらいトリオン体を解除したらどう？」

「あ？解除ってお前…」

「沢村！」

「…ごめん。うっかりしてた」

見かねた沢村が助け舟を出してきたが逆効果であった。

一馬は自宅で過ごしている時以外はトリオン体を解除しない。

事情は彼女もよく知っているはずだが、久しぶりだからかうっかり
出てしまったのだろうか。

「剣持さん、ジャックダニエルのストレートを」

「おい」

「いちらでございます」

長い付き合いだからわかることだが東はバーボンは得意ではない。ましてやストレートなど。

さらに何を思ったのがショットグラスの中身を一気に飲み干す。

「!…はあっ」

「おい、無理すんなよ」

大きく深呼吸をし、前髪をかき上げると意を決したように話し出した。

「なあ横山。俺は今でも後悔してるよ」

「あの時、お前を信じて待つべきだった」

「それは…わかんねえだろ」

「横山、聞いてくれ。俺は…」

「桶狭間！お前の好きな桶狭間だ！」

「え？」

「あの時信長は雨が降るって確信があつて、奇襲できるって確信があつて行動を移したんか？」

「…いいや。それを含めて信長の天運だった」

「だろ。もしもやたらればはない。卒論の時、俺に散々指摘してきたくせに」

最初に頼んだブラックレインはとつくに飲み干したのだが、わざとらしくシャンパングラスを傾けて口をつけてみせる。

「東さ、俺は蟠りが無いって言ったら嘘になる」

「また3人で馬鹿やりたいとも思うよ」

「でもまだ自分自身消化し切れてない部分があるんだ。だから今はそういう類の話はしたくない」

「お前の懺悔みたいなのを聞くのはちよつと待ってくれ。少なくとも素面じゃ無理」

「…わかった」

東は納得がいていない様子だったが、最後には諦めて頷いてみせた。

「さて：劔持さん、サイドカー三つ！ブランデーはヘネシーのXO使って！」

「かしこまりました」

「ちよつと！誰の払いだと思ってるのよ!？」

「おい横山、サイドカーは勘弁してくれ」

「うるせー。俺の復帰祝いだろ、少しは合わせろよ」

結局その日は日付が変わってようやくお開きになった。

—————

朝方の体調は最悪であった。

相変わらず東とは会話は少なかったが悪くなかったと思う。

防衛任務には明日の夜から入ることに決まった。

面識がある隊員とはすぐに顔を合わせるようになるうが、迅からのオーダーの一つに着手するべくひとまず本部の食堂へ向かった。

残念なことにお目当てのカレーは売り切れであった。

ちなみに一馬の好きなトッピングはカツでもなくナスでもなく卵黄である。

仕方なく気まぐれチャーハンに卵黄を落とし未練がましく味わうことにした。

ただ昼時な事もあり席が空いていない。

辺りを見渡すとこれでもかどわりやすい金髪頭。

4人テーブルを2人で使っているではないか。

彼とはそこそ仲が良かったため、ひとまず声をかけることにした。

「よう、洗太郎。相変わらず、すげー金髪だな」

「一馬さん！やつと戻ってきたんすね！」

「昨日な。堤と小佐野は元気してる？」

一馬は仲の良い隊員、とりわけ気の許した隊員は下の名前で呼ぶ。それは男女共に変わらない。尤も、それが軋轢を生む事も多いのだが。

「諏訪さん、こちらの方は？」

「ああ、お前は前のシーズンの終盤にデビューしたから知らねーだ

ろ。」

「横山一馬さんだ。おつかねえ顔してるがこれでもまだアラサー」

「おい洗太郎、てめー」

すかさず金髪頭をくしゃくしゃにかき混ぜてみせる。

じやれあう2人はさながら兄弟のようだ。

「あ、あの！諏訪隊に入隊しました、笹森日佐人です！よろしくお願ひしますー！」

「おう…なんて礼儀正しいやつだ…」

「一馬さんこの後暇つすか？良かったらウチの日佐人を一丁扱いてやってもらえねえ？」

良いように使われている気もしたが丁度よい。

前シーズン漆間隊に属していた一馬は終盤に関しては諏訪隊とのマッチングが無かったので笹森を知らない。

それに訓練室に頻繁に出入りしている諏訪なら新顔にも詳しいだろう。

「10本。それで諏訪、お前このあと小1時間付き合え」

「よっしゃ！日佐人、またとねー機会だぞ。モノにしてこいよ」

「はい！横山さん、よろしくお願ひします!!」

震えるほど良い子すぎる…

ヤンキーギャンブラー隊に彼はもつたない気がするのは気のせいだろうか。

第一章 再起 005 横山一馬③

「おい、まさかこれで終わりってんじゃないよな？」
「…まだまだ！」

圧倒的だった。

最初の2本は様子見でそれなりに長く戦っていたのだが、何を思ったのが3本目からは容赦なく倒しにかかっていた。

初動一太刀で首を刎ね、胸を一突き。

おおよそ稽古とは思えない。

(くそ!!とにかく横山さんより早く動き出さないと…)

「遅い、遅すぎる。お前は亀なんか？」

「なんでっ…!!」

—————

「うわっ、一馬さん相変わらず容赦ねーな…」

あちやあ、と天を仰ぎながらも彼の意図をわかっているので特には止めに入らない。

「こんな所でタバコを吸う奴があるか」

「げっ、風間」

換装を解いて一服しようとタバコを取り出したが、急に横に現れた風間によりそれは阻まれた。

「お前さ、カメレオンで近づいてくるのでやめろよ」

「気付かない諏訪が悪い」

雑談をしている間にもあつという間に9戦目が終わった。

鏑迫り合いになった瞬間に組み付かれ、足を払われて倒れた笹森の頭は一瞬でカチ割られた。

「大外刈りかよ」

「ほう、久々に良いものが見れた」

「あれ一時期レイジや荒船がやってたやつだよな？」

「付け焼き刃だな。あそこまで綺麗に決めるのはボーダーでも1人だけだろう。ただでさえ弧月は重量があるというのに、斬撃の合間に体術を組み込むのは至難の技だ」

「しかしあの人は変わらないな」

「ああ。バチバチギリギリしてるわ」

「だが流石だ。もう笹森の悪い癖を見抜いている」

「太刀川はただの馬鹿だしよ、荒船の理論にはまだついていけねえ。」

「馬さんなら話が早いと思つてよ」

「本来なら隊長の仕事だがな」

「…うるせー」

「……………」

動きが優等生すぎる。

それが笹森に対しての率直な感想であつた。

（性格が動きに表れてるってか。だがこいつはそんないい子ちゃんじゃねえ）

一本取られるたびに隠す事なく悔しさを表情に出す。

歯軋りが聞こえてきそうな勢いだ。

「10本目！日佐人、最後だぞ。気張れよ」

開始を告げるブザーが鳴り響いた。

「あの金髪が考えそうなことだ。わかりやすい罠がいれば諏訪隊は点数が取りやすくなるだろうさ」

「…何が言いたいんですか？」

「言わなきゃわかんねえか？別に誰でも良かったんだよ。お前の代わりは誰でもいるのさ」

実にわかりやすい挑発だが目の前の青年を乱すには十分な言葉であつた。

「このっ！」

予想通り笹森は突撃してきた。

ただ今までのようにそれを迎撃するのではなく受け止めた。

「あいつも馬鹿だよなあ。ドカドカ散弾銃打つしか脳がねえもんだから、いつまで経つても中位から抜け出せない」

「諏訪さんの悪口を言わないで下さいっ!!」

「だがお前みたいなお利口さんがいてラッキーだった。何でも言うこと聞くんだろ？まるで奴隷だな」

「うおおおっ!!」

もはや感情に任せて剣を振るう。

セオリーや型などあつたものではないが、その勢いは大したものであつた。

(想像通りだ。こいつは抱え込みすぎなタイプだな)

「という訳で、お前みたいな量産型モブに構つてる暇はないんだわ」

「うわっ!!」

受け止めた弧月を回すようにしていなすと左斜め下から斬撃を走らせた。

(受け止めるか?!いや、それじゃ間に合わない。なら…!!)

「おっ?」

笹森は身を低くすると左足を軸にして左側に回転することで致命傷をギリギリ逃れた。

(今だ!!ここしかない!)

右上に伸びきつた一馬の腹部を目掛けて突きを走らせる。

「よっしゃあ!!こりゃあ決まるんじゃないか?」

諏訪の目から見ても勝利を確信した綺麗な形であつた。
が、

「残念無念」

「えっ!?!」

笹森の渾身の一撃は急に勢いが止まり彼の首が飛んだ。

「10本終了。勝者、横山」

無機質なアナウンスだけが響いた。

—————

「おい、何が起こつた!?!」

「角度が悪くてわからんな。諏訪、別のカメラのリプレイを出せ」

一撃の刹那がスローモーションで巻き戻る。

笹森が一撃を放つ瞬間一馬は自ら前に出る形で突きの勢いを殺し、右上に伸びた両腕を引き戻し肘で受け止めた。

右腕の肘から下は飛んだが完全に勢いを殺された突きはそこで止

まり、あとは結果の通りとなった。

「かあくあんなのアリかよ…」

「捨て身狙いのカウンターといったところか」

「あれ、運次第では日佐人が勝ってたんじゃないか？」

「いや違うな、あの人は防げる確信があつて行動した。笹森との力量、

シチュエーション、過程、結果…全て計算の上だろう」

「なんつーか、執念がすげえよな」

「ああ。あそこまでいくと最早変態だな」

「よう、最後のは惜しかったな」

「…」

笹森は唇を噛み締めていた。

自分だけではなく隊長を馬鹿にされた上一本も取れずにこのザマである。

「ま、お前の腕じゃこんなもんだろ。次、来週の月曜14時からな」

「え？」

「予定調整しとくように諏訪に言つといてくれ」

後に笹森は語る。

一馬のファーストインプレッションは「最低最悪」であつたと。